

ベトナムにおける地域別の日系投資の特徴

ベトナムデスク 斉藤 雄久

ベトナムの国土は細長くS字を描いており、東西に約 600 キロ、南北に約 1650 キロで、おおまかに北部、中部、南部の三つに分けられます。それぞれの地域は気候や人々の気質も違い、言語も同じベトナム語ながら発音や用語（父や母といった基本的な言葉も違ってきます。）も地域によって異なっています。またそれぞれの地域間で、意外なほど人の交わりが少なく、例えばハノイで南部出身のベトナム人を探すには少々苦労するほどです。ですので、良い意味でも悪い意味でも、それぞれが地域の特性をいまだ濃厚に残しています。

今回は各地域における日系投資の特徴について簡単に書いてみます。具体的に申しますと、北部は首都であるハノイ市を中心とし、現在その周辺 30 から 50 キロのバクニン、フンイエン、ハイズオン、ピンフック、ハタイといった各省に工業団地が建設され、またハノイから 100 キロほど離れた北部最大の港湾都市ハイフォンにも、日系を含む工業団地があります。北部での日系投資の中心は、トヨタ、ホンダ、ヤマハ、日野に代表される二輪、四輪の製造業、キャノン、ブラザーに代表されるプリンターの製造業で、その部品供給メーカー多数も上記の企業の周辺に進出しています。また、TOTO、INAX といった衛生陶器大手の工場もあります。北部では今後も日系、シンガポール系の工業団地が造成されることから、製造業の一層の進出が期待されますが、問題点としては地場の裾野産業が弱いことです。この問題はベトナム全土で言えることですが、特に精密機械部品製造の分野においては、南部との比較で見ると、地場の企業で外資企業のサプライヤーになりうる品質の製品を製造できる企業がほとんどなく、外国からの輸入あるいは外資企業からの供給に頼らざるを得ない状況です。そのため、現地での外資企業進出への期待は高いものがあります。また、金型メーカーが不足しているという声もよく耳にいたします。

次に中部ですが、これはダナンを中心に古都フエや精油所が建設されているズンクワットなどを含む地域です。ダナンは数年前から日系企業の進出先として注目を集めるようになりました。その理由は、低廉な賃金水準、ハノイ、ホーチミン市の中間にある地理的な利便性、ラオス経由でダナンとタイの首都バンコクを結ぶ東西回廊、リゾート地としての潜在力、大型船が接岸可能な港湾などです。しかしながら、ダナン進出が活気を見せ始めた 2006 年秋に台風による大きな被害が発生しました。実際にダナン周辺は毎年のように台風や大雨による災害が起こっていましたが、この台風をきっかけに、日系製造業のダナンへの進出熱は、その後もいささか冷え気味です。また、船便も外国と直接結ぶ航路がないため、サイゴン港経由等での出荷で運賃が高い、外国語のできるなどの人材の確保が難しいとの指摘もあります。なお、今後ダナンで注目すべきことは、ベトナム最大手の IT 企業である FPT が市と共同で、ソフトパーク、大学、住宅地などを含む新都市を建設する計画があることです。そのため将来的にダナンは、IT 産業で注目される可能性があります。

最後に南部ですが、これはホーチミン市を中心に、30 キロほどの距離で隣接するドンナ

イ、ビンズオンの各省などの地域です。日系製造業のベトナム進出の口火を切ったのは、ホーチミン市タントゥアン輸出加工区への進出でしたが、現在も同加工区内には、電気・電子、機械、縫製など 50 社ほどの日系企業があります。南部での日系投資の特徴は業種が非常に多様であることと、マブチモーター、富士通などに代表される輸出企業が進出すると共に、味の素、エースコック、久光製薬、ロート、大正製薬などの食品や医薬品、ソニー、東芝、三洋電機といった家電などの国内市場を対象とした企業が進出していることです。こうした企業が進出しているのは、ホーチミン市周辺が人口、購買力においてベトナム最大の市場であることがその理由です。上記の家電、食品、医薬品等の各社は、ベトナム人の誰もが知る知名度を獲得しており、今後も国の経済成長に基づいて市場を拡大していくことが予測されます。また、ヤクルト、カルピス（当初は缶コーヒー）、キリンといった企業もベトナム市場でのビジネスを開始する予定です。食品の関係でもう少し記述しますと、南部のメコンデルタで収穫されるエビ（ブラックタイガー）が冷凍加工されて、日本にも輸出されています。南部には食料品の冷凍、加工企業も多いことから、今後中国から製造の委託先がシフトしてくる可能性もあります。その他では、ホーチミン市にも日系 IT 企業が進出しており、この分野も成長が期待されます。